



コロナ時代の民族誌映画祭

川瀬 慈

民博 人類基礎理論研究部



作品選抜委員会による上映プログラム作成準備の様子
(撮影：ロベルト・シャク、2014年)

文化事象の記録と研究を映画的手法でおこなう民族誌映画の制作は、映像人類学の中心的な実践に位置付けられてきた。近年、欧州人類学映画祭機構(CAFFE)に属する学術映画祭を基盤に、人類学における映像実践をめぐる議論が盛り上がりつつある。わたしは二〇二〇年五月にドイツのゲッティンゲン国際民族誌映画祭の審査委員を担当することになった。一九九四年にスタートし隔年で開催されてきた本映画祭であるが、第二五回の今回は、新型コロナウイルスの世界的な蔓延を受け、オンラインでの開催となった。

ゲッティンゲン国際民族誌映画祭

本映画祭はドイツ国立科学映画研究所(IWF)の元職員が中心となって運営される。IWFは、一九五〇年代半ばの設立時から一九九〇年代初頭まで、制作者の存在をできうる限り排した観察記録の手法に基づく映像百科事典「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」(通称ECフィルム)の制作をおこなってきたことで知られる。IWFは制作したフィルムを世界各地の研究・教育機関に売り込むことに成功し、日本を含む各国の学術映像の制作基準にきわめて大きな影響を与えた。国立民族学博物館も一三〇〇本を超えるECフィルムをIWFより購入している。

本映画祭はおもに、メインプログラムと学生映画部門によって構成される。メインプログラムは毎回テーマを設定して、数百の出品作から五〇〜六〇本の作品を選抜する。今回も、(女性による危機への対応)、(文化遺産保護への取り組み)、(都市化の影響)をはじめとするテーマが掲げられた。学生映画部門はコンペティションが設けられ、二〇本の上映作(一七本の出品作より選抜)のなかから最優秀作品を一本選ぶ。本部門の審査は、わたしとトロムソ大学の映像人類学者のトロンド・ワグ、マインツ大学の社会人類学者ジモネ・ファイファアの三名でおこなった。三名の審査委員の学術映画に求める理想が決定的に異なるという背景もあり、受賞作を選定するオンライン

新型コロナウイルスの世界的蔓延に、映画業界も多大なる影響を受けたことは今さら言うまでもない。映画館は長期間の休業を余儀なくされ、主要な映画祭はオンライン開催へと移行した。今回は今年を振り返るため、特別編として欧州の主要な学術映画祭であるゲッティンゲン国際民族誌映画祭のオンライン開催の様子を紹介する。



2020年の学生映画部門最優秀作品「Flox」
(提供：ハディ・ムハンマド)

協議は難航し、三日間、じつに八時間もの時間を費やした。

最終的に、最優秀作品にはエジプト人監督ハディ・ムハンマドが撮影・制作した「Flox」が選ばれた。本作は、カイロ市内の混沌とした交通状況におけるミニバス運転手たちの仕事の様子を描く。男性中心のマッチョな競争社会における、運転手間の狡猾な駆け引き、顧客との些細かつ豊穡なやりとり、さらには運転技術をめぐる創意工夫を記録した観察映画である。多くの入選作が、人類学者による長期のフィールドワークに基づき、特定の個人やその家族を淡々と観察する手法をとるのに対し、本作は運転手間のつながり、仕事が要求する緊張感を生々しく、ときに荒々しく伝えていた点が評価された。

オンライン上映の可能性

ところで、わたしと本映画祭とのかわりなところは深い。第九回大会(二〇〇八年)では一研究者として入選した拙作の発表をおこない、第一一回大会(二〇二二年)では学生映画部門の審査委員を担当し、第二一回大会(二〇一四年)では出品作のなかから入選作を絞る作品選抜委員を務めると同時に映画祭のプログラム作りにかかわった。例年はゲッティンゲン市内にある中世の大聖堂を改良した荘厳な雰囲気をもち文書館を利用して映画祭をおこなう。今回はオンライン開催という

ことで、参加者は映画祭事務局よりIDとパスワードを受けとり、オンライン上の動画サイトVimeo上に設けられた映画祭のページ(入選作品をセクション)にまとめたいわば映像アーカイブ)に行き、関心のある作品を二週間にわたり視聴することとなった。また、オンライン上で視聴者と作品の監督が質疑応答をおこなう時間も設けられた。例年は、せいぜい五日間の開催期間である。参加者は、プログラム上にある気になった作品を見逃すことが多い。しかしながら今回は、二週間という比較的余裕のある期間、参加者は関心をもった作品を何度もオンラインで視聴することが許された。映画祭ディレクターによれば、例年であれば三〇〇人程の参加者であるが、オンラインで開催した今年は、通常の四倍にあたる二二〇〇人が参加し議論もじつに充実していたとのことであった。

時差への対応など決して容易ではないが、パネミック終息後も、映画祭現場でのプログラムと並行してオンラインを通して関連企画が探求されるべきなのかもしれない。



2020年の学生映画部門最優秀作品「Flox」の制作現場
(提供：ハディ・ムハンマド)